

28期所沢地域史 グループワーク 発表会

2023-2-16 記 小暮 恒二

■開催日時：2023年2月16日（木）13時30分～14時45分

■参加者：24名（会員21名、所沢地域史発表者3名） ■会場 中央公民館 8、9号室

■発表者：所沢市民大学第28期修了 所沢地域史グループの皆様

発表の概要について説明の後、所沢の綿織物と関連させつつ「幕末期の寺子屋教育」を中心とした発表があり、続いて「綿織物の発展史」の発表、最後に「所沢地域経済の盛衰」について発表されました。以下に発表内容の概要をまとめました。

テーマ「所沢の綿織物繁盛記」

1 幕末期の寺子屋教育

江戸時代に入り世情が安定し経済活動が活発化し、特に中期から後期にかけて、都市部では商いの手法として教育が普及し、農村部では農間余業が発達し、日銭商いが盛んになるに伴い、小規模農家の子女も教育の必要性が見直され寺子屋に関心が向けられた。所沢では墓碑・顕彰碑が92基確認されており相応の寺子屋があったと推測される。

授業風景を習字で見ると、師匠の前に3人並べ各々に手本を渡し、読み方・書き方を示し練習させ会得させた後、既習の全部に巨り要点を復習させ、各々交代して全寺子に対応している。読書は主に素読だが、5、6人ずつ書物を携え師匠の前に進み個別教授を受け、会得するまで居残る。このようにして各寺子の進捗状況に応じて直接個別指導を行い、各寺子は勉学の進捗に応じて個人差が生じ、出来る者は先に進む教育方針のようである。

寺子屋の就学率の資料は見つからなかったが、明治7年の所沢市域の就学率を見ると、際立っている。また女子の就学率が高いのは、この時期の北野村などは木綿織稼業が発展し、金銭収入も良く小規模耕作農家の子女も入門していたからと考えられる。

所沢の寺子屋師匠をみると、大勢の寺子・塾生を育てた師匠として沢田泉山がいる。漢学・国学・詩・漢文・数学を学び、医学にも臨んだが、近隣より教えを乞うものが多く医学を断念し北広堂を開いた。その後、清蓮院（しょうれんいん）に入り書の免許を取得した。明治5年（1872年）の学制により、明治6年に熊谷県庁において試問を受け、ついで群馬県厩橋中学校普通学を修業し、明治6年より自宅に狭山学校を開設し、その運営に努め、明治25年には旧狭山学校を校舎とし、明治高等学校を開校した。

北広堂では、入門直後の寺子には習字の教材としては「いろは歌」を始め、「国尽・村名」などを学ばせ、読書の教材には、「百姓往来」「庭訓往来」に加えて泉山自作の「北野往来」を学ばせていた。北野村内からの寺子の農家では、農間余業としての養蚕・綿織物・製茶で経済的に余裕が出て、さほどの貧富の差なく教育を受けていたようである。この北広堂の出身者に、所沢織物の販路を全国に広げ名声をなした16代向山小平次や後に衆議院議長となった粕谷義三がいた。



寺子屋教育は、農村の子弟の奉公先での優位性を高め、明治維新以降の普通教育の発展に寄与することが非常に大きかったと言える。

2 綿織物発展史

所沢地域は江戸時代末期より入間地方で生産された絹織物や絹綿織物の集散地として栄えた。最初に作り始められたのは所沢に隣接している武蔵村山地域で、ここで織り始められたのが所沢紺紵の起源である。

織物には多くの工程があり、農業の副業として始められたが、織物を専業とする家も現れた。糸の仕入れから反物として織りあげるまで 10 日間ほどかかる。機織りの仕事をする機織り娘は、朝 5 時ごろから夜 10 時ごろまで織り続け、1 日かけて 1 反ほどしか織りあげられなかった。それでも、機織りは収益の上がる仕事であった。綿織物の収益がいかに重要であったか、明治初期の北野村の生産物の価格比でみると、木綿縞 20.5%、糸の染色の原料となる藍 4% で合わせると約 25% が綿織物に関する収入で大きな収入源であったと思われる。

機織りの機械についても、所沢地域は地機から高機に早期に移行している。明治 12 年埼玉県全体で高機の占める割合が 39.9% であったが、所沢を含む入間郡は 88.8% であり、技術革新が進んでいたことが分かる。この結果、織物生産量において、所沢を含む入間郡は県内の生産量の約 25% を占めるまでになっていた。このようにして生産された織物の販売は、第 16 代向山小平次など買継商により販路を拡大していった。そして村山紺と呼ばれていた織物が所沢紺と呼ばれるようになっていく。所沢紺の生産量は明治 26 年 41 万反から明治 32 年には 82 万反と約 2 倍となっている。

幕末の所沢地域では、農業を補完する新たな産業として綿織物生産が盛んになり、綿織物に関わった多くの人々が切磋琢磨しながら所沢地域の発展を支えてきた。そして久留米紺、伊予紺と肩を並べるまでに所沢紺が繁盛していた時代があったことを確認することができた。

3 所沢地域経済の盛衰（所沢ブランドの歴史）

所沢の地理的条件として、北関東から武蔵国府（府中）や鎌倉に向かう途中に位置する。秩父・入間から江戸に向かう途中に所沢がある。所沢は交通の要衝であり、宿場、物資の集積地として発展してきた。一方、土地の地味・水利が良くなく畑作生産が中心であり、年貢は金納。金納であるため、商品作物の生産、農間余業が進み、水田地帯より早期に貨幣経済に組み入れられた。富の偏りにより階層分化も進む。

階層分化の動因（仮説）として、①土地の生産性：富が蓄積すると、階層分化が進む。②災害（洪水・早害・虫害・噴火など）：貧農のほうがダメージを受けやすく、階層分化が進む。③年貢の増徴：零細農民のほうが影響が大きい。④貨幣経済・商品経済・農間余業の進展が考えられる。④については、市場情報の入手、生産性向上への投資、労働力の投入などの局面において、階層分化が進む。

【所沢地域経済の繁栄】

紺木綿の生産：緯糸が単糸であることと、原料糸にガラ紡績糸（安価）を使用するなどにより原料費を抑え、農間余業として参入しやすくした（農民的特質）。そして製品価格を安くしたことにより、爆発的に全国で売れた。なお、①原料の調達②生産の分業③集荷④販売の各局面で、交通の要衝としての所沢の真価が発揮された。そして、紺木綿のブランド化をはかり所沢飛白として販売に注力。明治 30 年代には久留米紺・伊予紺などと並んで日本の綿織物市場を席卷した。

【所沢地域経済の衰退】

(1) 明治末期～大正期になると、中小機屋が多い所沢絨は衰退していく。

品質の維持・製品の統一（規格化）が徹底されにくい ← 農民的特質（農間余業）

正藍染め以外の粗悪品や類似品、不良品の横行により信用を失い、所沢市場あげての技術革新（力織機導入など）が進まず、大正期の所沢飛白は関西以西や都市市場から締め出され衰退。

昭和5年、所沢飛白同業組合解散。所沢織物同業組合に吸収。

なお、昭和5～6年頃以降、機屋の集約・製品転換が進む。（倉片甲太郎など）

【所沢地域経済の変質】

(1) 戦後、所沢地域経済圏は、経済のグローバル化により、東京を中心とした日本経済圏に飲みこまれていく。また、所沢絨の衰退により「工業生産拠点」を失い、「交通（流通）の要衝」という長所を軸として、所沢経済は歩み始める。つまり、所沢絨というブランドを失い、所沢とは何かという疑問に対する答え（アイデンティティ）を模索する。

(2) 「首都圏 35 キロメートルに位置する所沢市の今後の発展方向について」昭和 42 年

①農業：農業畜産団地をめざす。

②工業：工業化を放棄して、住宅都市ないしレクリエーション都市を志向すべき。

③商業：関越高速道路、国鉄外環状線等、輸送施設の出現によって、商業が発展するはず

(3) 所沢市の現在（所沢ブランドの模索）

参考 <絨、自然、文化 - 元気あふれる「よきふるさと所沢」 所沢市第6次総合計画>

(4) 所沢市の大都市近郊都市としての機能の現在

①東京のベッドタウン②入間地方の消費・レクリエーション拠点

③物流の中継拠点

市民大学 28 期は、コロナ禍で開講が 1 年遅れた上に、感染拡大により途中での休講を余儀なくされ、2 年次の開講も 1 か月遅れとなりました。こうした中でのグループワークでしたが、受講生の皆さんにおかれましては意欲的に地域史を学ばれ研究をまとめられました。本日の発表に際しても、さらに学ばれたことも加えて発表していただきました。発表者の皆様に敬意を表するとともに感謝申し上げます次第です。

担当 C グループ（佐野、佐藤、藤澤、小林、柴崎、荒幡、粕谷、小暮）